慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾の社会心理学
Sub Title	The phases of the meaning construction of "Futoko (school non-attending)" : focusing on the possession of Movement narrative within a social movement
Author	青池, 愼一(Aoike, Shinichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.48- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾150 年記念講演会 : 慶應義塾の社会学 : 回顧と展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 14 号（2009）

慶 應 義 塾 の 社 会 心 理 学

青池　愼一

序

平成 20 年（2008）、慶應義塾は創立 150 周年をむかえ、三田社会学会は、そのことを記念し、慶應義塾創立 150 周年記念講演として、「慶應義塾の社会学―回顧と展望」と題する講演会を開催した。ここにおける社会学は、きわめて広義の意味を持つもので、Sociology としての社会学、文化人類学、マス・コミュニケーション研究、そして社会心理学の４研究領域を含むものとしてのそれであった。

本稿は、その時の講演会において行った報告を基本としながら、慶應義塾の社会心理学について述べていくものである。

今日、慶應義塾、慶應義塾大学における社会心理学の研究と教育は、文学部、メディア・コミュニケーション研究所、商学部、総合政策学部、日本語・日本文化教育センターなどに所属する少なからぬ数の、優秀な専任教員などによって、担われ、活発に展開されている。

そして、これら現役の専任教員の方々の社会心理学における専門諸領域は多様で多岐にわたっているのである。また、将来の慶應義塾大学の社会心理学を担うであろう多くの、将来性豊かな大学院生が存在しているのである。

１．社会心理学とは

あらためて述べるまでもないことであろうが、社会心理学という科学（学問）はいかなるものであるのか、そしてその成立とかかわりあっているであろう社会心理学の基本的性格についてまず簡潔に述べてみよう。

社会心理学（social psychology）は、社会的存在としての人間の心理過程や行動が社会的要因によってどのように、そしてどのような影響を受けているかを明らかにする科学である。
大橋（昭和 54＝1979）は、社会心理学を、人間の（あるいはさらに一般的には、行動の主体の）知覚、思考、感情、態度、行為などが社会的な要因によってどのように影響されるかを明らかにしようとする学問であるとしているのである。

今日、このように定義される社会心理学は、きわめて多岐にわたる多様な研究分野を持っているのである。

このことは、例えば、古畑和孝編『社会心理学小辞典』、有斐閣（1994 年）における「社会心理学」の項においても示されている。すなわち、①社会的状況の中での個人の行動―自己、対人

認知、帰属過程、態度と態度変容など、②相互作用過程―コミュニケーション、対人魅力と愛、攻撃・暴力と援助など、③集団内行動―集団の性質・機能・構造・過程、リーダシップと社会的勢力など、④集団間行動―協同と競争、集団間葛藤とその解決、人種的偏見と差別、性差別、取り引き、交渉など、⑤環境心理学―空間配置と人間行動、プライバシー、過密感、ストレスなどの心理学的社会心理学と、⑥制度・組織・社会体制などとの関連での政治的（例：投票）行動、経済的(例：消費・購買)行動、集合行動、普及過程、マスコミなどの社会学的社会心理学、⑦異文化、国際間での人間行動の比較研究などの多岐にわたる研究領域・分野があることが示されているのである。

そして、それと共に社会心理学に心理学的社会心理学と社会学的社会心理学とがあることが示されているのである。

心理学的社会心理学と社会学的社会心理学について、濱嶋朗、竹内郁郎、石川晃弘編『社会学小辞典』、有斐閣（1977 年）においても言及されている。

すなわち、社会心理学は、社会学と心理学との境界領域に立つ科学であること。研究者の学問的背景や関心の方向によって、対象や方法に差が見られるが、大別すれば、社会的文脈のなかでの個人の行動や心理を研究対象とする心理学的な社会心理学と、社会成員に共有されている行動や心理を対象とする社会学的な社会心理学に分けられることが示されているのである。また、ニューカム（昭和 39＝1964）は、社会心理学は、一つの独自の主題や、独自の観点やそれ自体の原理を持っているものである。その主題は諸個人の相互作用であり、その観点は、社会の一員であるという事実によって人間生活体の機能がどのように変容をこうむるか、ということを研究する科学者の観点であるとするのである。

そして、この社会心理学は、出会うことがない個人心理学と社会学（ないし文化人類学）の出会いの会合地盤を提供するもので心理学と社会学の両分野のデータを借用し、これに基づいて独自の原理を樹立するものであるとしているのである。

そして、さらに、しかし、原形質そのものを研究することは、社会心理学者の領分ではない。むしろ社会心理学者は、個人心理学の知識を借用し、個人心理学は、さらに生化学や生理学の知識を借りてくると述べると共に、社会心理学者は、原形質そのものも研究しないが、また社会そのものを研究するものでもない。社会心理学者は、個人心理学からと同じように社会学や文化人類学の知識を借用するとしているのである。

このように、社会心理学に、心理学的社会心理学と社会学的社会心理学が存在すること、もしくはそのような認識が存在していること。

社会心理学が社会学と心理学の境界領域に立つ科学であること。社会心理学が心理学と社会学（ないし文化人類学）に出会いの会合地盤を提供するものであること。そして、社会心理学が一つの独自の主題、独自の観点、原理を持っているものであるが、個人心理学と社会学（文化人類学）の知識を借用していること等々は、社会心理学の歴史とかかわり合う、社会心理学という科学（学問）の基本的性格を構成するものであると言うことができるであろう。

２．社会心理学の歴史

慶應義塾、慶應義塾大学における社会心理学の研究と教育の基礎を築かれたのは、佐原六郎先生であるということができるであろう。佐原先生は、昭和 14 年（1939）に、「社会心理学の問題―その史的概観―」というきわめて長文の論文を『哲学』第二十輯（三田哲学会）に発表された。すなわち、佐原（昭和 14＝1939）である。これは、大正 15 年（1926）に第一輯が刊行された『哲学』（三田哲学会）における最初の社会心理学に関する論文であると言ってよいであろう。この論文と佐原（昭和 24＝1949）に基本的に依拠し、社会心理学の歴史について概観してみたい。

それは、慶應義塾、慶應義塾大学における社会心理学の研究と教育の歴史（回顧）は、社会心理学の歴史、学説史とのかかわりにおいても、位置づけられていくものであるからである。佐原（昭和 14=1939）および佐原（昭和 24=1949）によれば、社会心理学の 20 世紀初頭に至るまでの歴史、学説史は以下のとおりであると言えるであろう。

（１）民族心理学

19 世紀において社会心理的科学の必要と可能性を認めた最初の学者はヘルベルト（J. F. Herbert）であるとされている。当時一般には、人間の人格が生得的先天的性格によって決定されるというものであるという説が支配的であったのであるが、ヘルベルトは、その著『心理学教科書』（1816）および、『科学としての心理学』（1824-25）において、人間の精神生活が大体において後天的経験の所産であるとし、それ故、円熟した心理学は、社会的存在としての人間を研究しなければならないとしたとのことである。

その後の社会心理学の歴史として注目すべきは、ドイツにおける民族心理学であるとされているのである。

ラーツァルズ（M. Lazarus）、シュタインタール（H. Steinthal）、そしてとくにヴント（W. Wundt）の研究である。

ヴントは、その大著『民族心理学』第一巻の上（1900 年）の開巻第一頁において、民族心理学を、人類共同社会の一般的発達と、普遍的価値を有する共同の精神的所産の成立の根底にある心理過程を研究することであるとしているとのことである。

ヴントは、1920 年までに『民族心理学』全 10 巻を刊行したとのことである。

ドイツにおける民族心理学が主として統合的民族心理学に重点をおいたのに対し、フランスでは、人種、民族、国民等の集団における集団的精神または集団的性格の変異を明らかにしようとする差異的民族心理学が主として展開されたのである。

ルトゥルノー（C. Letourneau）、プートミー（E. G. Boutmy）、フィエ（A. Fouillée）等の研究がその代表的なものであるとしている。

（2）集合心理学

現代社会心理学の一先駆としての民族心理学が、やがて、心理学そのものよりも、むしろ民族学、文化人類学、社会学等の領域に入りこんでいったとのことである。それに対し、イタリアおよびフランスに発達し、さらにアメリカに移入され発達をとげ、1890 年から 1910 年頃にかけて全盛を極めたのが集合心理学（collective psychology）であるとされている。この集合心理学は集団心理学ともいわれるもので、無組織的な社会または集団の社会心理学的現象か、あるいは社会または集団の成員間に生じる情意的一致の現象、すなわち集合行動を研究対象とするものであるとされている。

この集合心理学とされるものに含まれる研究としては、シゲーレ（S. Sighele）の群集研究、ル・ボン（Le Bon）の群集研究、タルド（G. Tarde）の群集論と公衆論、ベージェット（W. Bagehot）の模倣論、タルドの模倣論などが示されているのである。

（3）個人本位の社会心理学

集合心理学において扱われてきた問題は、ほとんど社会学の対象として主として社会学者、少なくとも心理学的社会学者によって研究されたものであるが、社会の本質を心理的なものとみなし、心理学をもって社会学が依拠すべき基礎科学とすることが、正当なものであるかは疑問であるとするのである。

しかるに、既に社会学内において心理学排斥の傾向が生じており従来、心理学的社会心理学が扱っていた諸問題は、社会本位の社会心理学、または社会学的社会心理学の問題として研究されるようになったと述べられているのである。

この社会本位の社会心理学、社会学的社会心理学に対抗する個人本位の、あるいは心理学的社会心理学の主張が行なわれるようになったとするのである。社会本位の社会学は、主として心理学的社会学として 1890 年頃から 1910 年までの間全盛を極めたが、これらに対する批判が 1910 年頃から台頭してきた個人本位の社会心理学によって表明されるようになってきたとのことである。

この個人本位の社会心理学の系譜としては、マクドウガル（W. McDougall）の本能論的社会心理学、トゥロッター（W. Trotter）の群居本能論などの本能その他の生得的傾向またはそれに準ずる心的経験を重視する個人本位的社会心理学と環境に重点をおく人格形成論的社会心理学と呼ぶべき個人本位的社会心理学が存在しているとするのである。

この人格形成論的社会心理学における研究者としては、ジェームズ（W. James）、ボールドウィン（J. M. Baldwin）、クーリー（C. H. Cooley）などが挙げられている。

そして、個人本位の社会心理学、心理学的社会心理学の主張はフロイド・オールポート（F. H. Allport）において最も明確なものとなったとしているのである。

３．慶應義塾、慶應義塾大学における社会心理学の教育の歴史

慶應義塾、慶應義塾大学において社会心理学のカリキュラムがいかに展開してきたのか、その歴史を見てみよう。

今日、慶應義塾大学における社会心理学に関連するカリキュラムは、必ずしも十全なものではないが、概論、各特殊研究、方法論等から構成されたものとなっている。

ここに至るまでの歴史はいかなるものであったのであろうか。

文学部および大学院社会学研究科に重点をおきつつ検討していこう。

まず、文学部について、『慶應義塾百年史別巻（大学編）』（慶應義塾、昭和 37 年(=1962)）に依拠して、そのカリキュラムの歴史を検討していきたい。

明治 10 年代の終わりの近いころの正科、別科の学規において、文学部系統の学問、すなわち歴史学、論理学、心理学、哲学、教育学、道徳学、社会学などの学科目が課程の中で広く重要な地位を占めている。

明治 23 年（1890）1 月、慶應義塾に大学部が創立され、理財・法律の２科とならんで、文学科が置かれた。文学科として発足した当初の課程として、第２学年に心理学、第３学年に社会学がおかれている。（単一未分科の課程）

明治 33 年（1900）学制改革が行なわれた。

大学部に政治科を新設するとともに、大学部は年限３年を５年にし下の２年を各科共通の予科、上の３年は従来どおり専門学の履修。

新学則の特色：４学科の枠をはずして全学科自由聴講。文学科は名目は、制度上消えさり、また明治 34 年主任教授ペリーが従来の学生３名を卒業させて満期帰米すると事実上廃絶。（明治 37 年に文学科復活）

明治 36 年（1906）、文部省は「専門学校令」公布。義塾大学部もこれによることになり文学科復活。明治 37 年 5 月から本科第１学年の授業開始。復活当初の第１学年の学科目担当教師として、教育学・心理学　川合貞一（塾出身）が示されている。

明治 43 年（1910）文学科の専攻分化（文学・哲学・史学）。

明治 43 年当時の文学科の学科目として、文学科哲学において、心理学、社会学がおかれている。

大正７年（1918）に大学令が公布された。

大正９年（1920）、旧来の専門学校としての慶應義塾大学部を廃止して、新たに慶應義塾大学が誕生し、文学、経済学、法学、医学の４学部からなる総合大学となった。

この時できた文学部には、文学、哲学、史学の３学科がおかれ、それぞれの科に専攻が定められた。

哲学科について見てみると、A.認識論及哲学史を主とするもの、B.心理学及教育学を主とするもの、C.倫理学及社会学を主とするものが置かれている。

そして心理学、社会学の科目が設置されている。

また副科目（２科目を必修）のうちに心理学（民族）がおかれている。

また、史学科に民族心理学が設置されている。

昭和３年（1928)、文学、哲学、史学の３学科の枠を廃して、15 専攻学科に細分。

各学科の必修学科目として、心理学科に心理学、社会学科に社会学が設置されている。

さらに、選択の科目として、民族心理学が設置されている。

昭和 24 年（1949）新制大学として慶應義塾大学文学部は発足し、従来の予科３年、学部３年の６年制から、教養２年、専門２年の課程をもつ４年制に切り変えられた。

文学部の学科は依然として哲学、史学、文学の３分科制をとっていた。(昭和 26 年(1951)に図書館学科を付設し４学科)

昭和 33 年（1958）度における大学各学科の専攻課程、必修学科目および選択科目を見てみると、哲学科社会学（専攻）の必修科目として、社会心理学概論が設置されている。

また選択学科目として、社会心理学特殊が設置されている。

新制大学として発足当初の教授陣容と担当科目を見てみると、社会心理学（概論・演習)、社会心理学特殊調査の担当者が佐原六郎教授であることが示されている。社会心理学科目の担当者は佐原先生だけであったのである。

なお、昭和 33 年になって佐野勝男助教授（当時）が社会心理学特殊を担当。

新制大学としての慶應義塾大学文学部におけるカリキュラムとしての社会心理学に関して、さらに昭和 25 年（1950）～昭和 35 年（1960）の学部学則に依拠して見てみると、以下のことが示される。

昭和 25 年～昭和 31 年（1956）の学則において哲学科社会学専攻の必修学科目として、社会心理学[概論]、[演習]が設置されている。

昭和 32 年（1957）～昭和 35 年（1960）の学則において、哲学科社会学専攻の必修学科目として社会心理学概論が設置されていると共に、選択学科目として社会心理学特殊が設置されている。

これまでは、文学部において慶應義塾における社会心理学の教育、カリキュラムの歴史を見てきたが、昭和 26 年（1951）に大学院社会学研究科が発足した。

今日、大学院社会学研究科修士課程、博士課程において、社会心理学関連の数多くの講義科目、演習科目が設置されているが、初期における歴史はどのようなものであったのであろう。慶應義塾大学大学院社会学研究科履修案内（昭和 31 年度～昭和 39 年度）に依拠して、大学院社会学研究科における社会心理学関係のカリキュラムを見てみよう。

昭和 31 年（1956）度においては、修士課程社会学専攻に社会心理学の科目は設置されていない。修士課程心理学専攻において佐原六郎担当の社会心理学特論と社会心理学演習が設置されている。

なお、昭和 31 年度は、博士課程は設置されていない。

昭和 32 年（1957）度以降、修士課程社会学専攻に社会心理学特論、社会心理学演習が設置

されている。佐原六郎教授が基本的に担当されている。昭和 37 年（1962）度以降は、社会心理学特論は佐野勝男担当となっている。また社会心理学演習については、昭和 38 年（1963）度以降は佐原六郎・佐野勝男担当となっている。

博士課程社会学専攻に、昭和 32 年度において佐原六郎担当の社会心理学演習の設置が示されているが、この科目名は誤記の可能性が高い。昭和 33 年度以降、佐原六郎担当の社会心理学特殊研究、社会心理学特殊演習が設置されている。

以上のように、文学部および大学院社会心理学研究科における社会心理学関係のカリキュラムを見てきたが、まず第一に、文学部においては、昭和 25 年（1950）以前には、社会心理学という学名を記した科目は設置されてこなかったようであるということである。

昭和 25 年に哲学科社会学専攻の必修学科目として、はじめて設置されたのであった。大学院社会学研究科が発足時（昭和 26 年）に社会心理学という学名を記した科目が設置されていたかどうかは、資料不足のため不明である。しかし、少なくとも昭和 31 年度には設置されている。

いずれにしても、慶應義塾大学において、社会心理学という学名を記した科目が昭和 25 年にはじめて設置されたということができるであろうということである。

佐原（昭和 62=1987）は社会心理学という学名を表題に掲げた最初の単行本は、G. Tarde, Etude de Psychologie sociale（1898）であり、英語では E. A. Ross, Social Psychology（1908）と W. McDougall, An Introduction to Social Psychology（1908）であるとしている。そして、さらに佐原（昭和 62＝1987）は、日本では 1906 年（明治 39）に徳谷豊之助著『社会心理学』が公刊され、1908 年に遠藤隆吉著『社会心理と教育』、1909 年に小林郁著『社会心理学』、1910 年に小林郁著『社会心理研究』が発行されたことを述べている。

このように、社会心理学という学名を記した著作が、19 世紀末、20 世紀初頭に刊行されていたにもかかわらず、社会心理学という学名を記した科目は昭和 25 年（1950）まで設置されてこなかったのである。

しかし、このことは、慶應義塾、慶應義塾大学に固有の事柄ではないようである。

三井（2004）によれば、アメリカにおいても、大学における正式の学問として認知されたのは第二次世界大戦後である。そして、三井（2004）は、Sewell を次のように引用している。すなわち、「1930 年代において、大学院レベルで社会心理学のコースが提供されていたのは、シカゴ、コロンビア、ハーバード大学といったところであったが、それも心理学コースの付け足し程度で、決して満足のいくものではなかったのである。それが戦後になると、ミシガン、ハーバード、ィェール、コーネル、バークレイ、ミネソタ、ウィスコンシンといった大学に、独立した、大学院レベルでの社会心理学コースが設置され、心理学者と社会学者の協力体制が整えられたのである。こうして社会心理学はその黄金時代を迎えることになった」

第二に、心理学および社会学が学科目として明治 10 年代の終わりのころから設置されてきていることである。

各時代において、心理学と社会学という学科目にいかなる内容の心理学、社会学の講義が行なわれていたのか、資料が得られず不明である。しかし、これらの科目において社会心理学もしくは社会心理学的研究に関する講義が行なわれていた可能性は否定できないであろう。

第三に、大正９年（1920）、旧来の専門学校としての慶應義塾大学が廃止され、新たに誕生した慶應義塾大学文学部において心理学（民族）、民族心理学が設置されたことである。

文学部哲学科の C.倫理学及社会学を主とするものに心理学、社会学の科目が設置されていると共に、副科目のうちに心理学（民族）が設置されているのである。そして、史学科に民族心理学が設置されているのである。

学説史における民族心理学については、第二章において述べているが、民族心理学の影響の大きさが印象づけられよう。

４．慶應義塾、慶應義塾大学の社会心理学の研究と教育を担ってこられた（担っている）人々

現在、現職の専任教員として、慶應義塾大学における社会心理学の研究と教育を担っている方々の氏名、研究領域[1)] は次のとおりである。なお、昨年、平成 20 年（2008）に開催された三田社会学会の慶應義塾創立 150 周年記念講演における報告とは、定年退職などによって、異動が少し生じている。南隆男教授が定年退職によって慶應義塾大学を退職し、鈴木淳子教授が多年勤務してきた東北大学を退任し、母校である慶應義塾に着任したのである。

三井宏隆（文学部）　－　研究法・統計、集合行動、社会問題、社会病理
榊博文（文学部）　－　態度構造、態度変容・説得、信念、集合行動、歴史・理論
萩原滋（メディア・コミュニケーション研究所）　－　認知、コミュニケーション、文化
井下理（総合政策学部）　－　集団、研究法・統計、教育心理
吉川肇子（商学部）　－　認知、組織、消費・生活意識
鈴木淳子（文学部）　－　産業、性役割・ジェンダー、比較文化
李光鎬（文学部）　－　電子ネットワーキング、マス・コミュニケーション
木島伸彦（商学部）　－　パーソナリティ、異常心理学
小川（西秋）葉子（メディア・コミュニケーション研究所）　－　コミュニケーション
岬里美（日本語・日本文化教育センター）　－　異文化コミュニケーション

多様な専門研究領域を持っているこれらの専任教員の方々によって、慶應義塾大学の学部、大学院における社会心理学の研究と教育が担われているのである。

慶應義塾、慶應義塾大学の社会心理学の歴史を考える時、慶應義塾大学において社会心理学の研究・教育活動に従事され、慶應義塾大学の社会心理学の発展を支えてこられた方々や慶應義塾大学において研究活動をつみ重ねられ、現在塾外の諸大学などで、社会心理学の研究・教育者として活躍されている方々について述べることが必要であろう。塾外の諸大学で活躍され

ている方々は、そのことを通して慶應義塾大学の社会心理学の発展を支えてくれているのである。

これらの方々は次のとおりである。〔但し、これは、基本的に日本社会心理学会会員を中心に作製したものであるが、決して完全な[2]ものではなく、失礼があればお詫び申し上げたい。〕

佐原六郎（故人）、佐野勝男（名誉教授）、槙田仁（名誉教授）、関本昌秀（名誉教授）、宇野善康（名誉教授）、岩男寿美子（名誉教授）、山本和郎（名誉教授）、若林満（故人）、青池愼一（名誉教授、成城大学）、南隆男（名誉教授、帝京大学）、真鍋一史（青山学院大学）、小川浩一（日本大学）、遠藤彰郎（国学院大學）、田中康夫（東海大学）、国広陽子（東京女子大学）、斉藤慎一（東京女子大学）、水野由多加（関西大学）、玉井寛（福島学院大学）、久田満（上智大学）、石田米和（愛知淑徳大学）、阿山光利（福岡工業大学）、岩熊史朗（駿河台大学）、小林和久（小松短期大学）、新井範子（専修大学）、広田すみれ（武蔵工業大学）、李津娥（東京女子大学）、加賀美常美代（お茶の水女子大学）、兼高聖雄（日本大学）、武田圭太（愛知大学）、岩井阿礼（淑徳大学）、金官圭（韓国、東国大学）、有馬明恵（東京女子大学）、鈴木万希枝（東京工科大学）、仙田幸子（東北学院大学）、山本明（中部大学）とその他の人々。

【注】

1) 研究領域、専門領域については、基本的には日本社会心理学会等への本人の申告に基づいて示している。

2) 大まかに言って、世代順の列挙ということになっていると言ってよいであろう。初期の方々は、心理学、そして社会学というディシプリンを基礎として社会心理学の研究・教育者となられたと言ってよいであろう。しかし、次第に社会心理学や社会心理学の諸研究領域の中で訓練をうけ、社会心理学の研究・教育者となられた方々があらわれてきていると言うことができよう。

【文献・資料】

古畑和孝編、『社会心理学小辞典』、有斐閣、1994 年 10 月 30 日。

濱嶋朗、竹内郁郎、石川晃弘編、『社会学小辞典』、有斐閣、1977 年。

『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』、慶應義塾、昭和 37 年（1962）8 月 31 日。

『慶應義塾大学文学部学則』（昭和 25 年度～昭和 35 年度）、慶應義塾大学。

『慶應義塾大学大学院社会学研究科履修案内』（昭和 31 年度～昭和 39 年度）。

三井宏隆、「社会心理学とはどのような学問か」、青池愼一、榊博文編著、『現代社会心理学』、慶應義塾大学出版会株式会社、2004 年 5 月 25 日。

ニューカム、T. M.著、森東吾、萬成博共訳、『社会心理学』、培風館、昭和 39 年 6 月 30 日。

大橋正夫、「社会心理学とは何か」、大橋正夫、佐々木薫編、『社会心理学を学ぶ』、有斐閣、1994 年 10 月

30 日。
佐原六郎、「社会心理学の問題―その史的概観―」、『哲学』、第 20 輯、三田哲学会、昭和 14 年 4 月 15 日、41 頁～126 頁。
佐原六郎、『社会心理学―その史的発展―』、慶應通信株式会社、昭和 24 年 12 月 25 日。
佐原六郎、『社会学と社会心理学』、慶應通信株式会社、昭和 62 年 4 月 10 日。

（あおいけ　しんいち　成城大学社会イノベーション学部・慶應義塾大学名誉教授）